

人と森が仲良くなって、すてきな未来につながってゆく。

mamori

No.12
Autumn 2012

特集

明日の森へ、いっしょに歩こう。

付録

おやこ、ともだちで楽しむ

mamoriかるた4 この花の木を知りたいな

木と本と The tree and the book

家族で楽しめる、高知山の施設

みどりの遊び場

森からの贈り物

「mamori」は、木と人との共生、木の文化、森林環境税を活用した事業を伝える冊子です。

高知県は森林環境税を活用して、将来を担う子ども達への森林環境教育や森川海の連携・交流など、県民の主体的な活動の支援、間伐をはじめとする森林保全等を推進しています。森林率84%という全国一の森林県であることを誇りに、県民がそれぞれの立場で森林の将来を考えて欲しいと願います。



ビワ(枇杷)

バラ科 常緑高木
花期11~1月

奈良時代以前に中国から渡来したといわれ、日本では主に暖かい地方で果樹として栽培されています。室戸市や須崎市が産地として知られ、5~6月に熟した果実は、気温が高い地域ほどおいしいそうです。葉や種子は葉に利用されます。



ロウバイ(蠟梅)

ロウバイ科 落葉低木
花期1~2月

中国原産で江戸時代初期に渡来した、高さ2~5mの落葉低木です。名前に「梅」という字が入っているのは、花が咲く時期が同じで香りが似ているからですが、ウメの仲間ではありません。



トサミズキ(土佐水木)

マンサク科 落葉低木
花期3~4月

高知県の岩山に生える日本固有種で、木の高さは4mほどになるトサミズキ。この花は、高知市民の花に指定されていて、江戸時代中期から、観賞用として栽培され、現在も庭木としてよく植えられています。



ミツマタ(三椏・三叉)

ジンチョウゲ科 落葉低木
花期3~4月

中国~ヒマラヤ原産で、日本には室町時代に渡来しました。木の高さは2mほどで、木の皮には、灰色の縦じがあります。樹皮を製紙原料として利用し、明治以降は紙幣の原料になりました。枝が三つに分かれて出ることからこの名が付いています。



付録
おやこ、ともだちで楽しむ

mamoriかるた4

執筆・監修 高知県立牧野植物園

牧野植物園・秋から冬の催し

菊花展 / 2012年11月3日(土)~18日(日)

クリスマスウィーク / 2012年12月15日(土)~25日(火)

ラン展 / 2013年2月2日(土)~17日(日)



キブシ

キブシ科 落葉低木または小高木
花期3~4月

北海道西南部、本州、四国、九州に生える日本固有種で、木の高さは約2~4m。湿り気と日陰を好みます。昔は木の髄を行灯の芯に、また、果実に含まれるタンニンを、女性のたしなみとして行われていたお歯黒に用いました。



フジツツジ(藤躑躅)

ツツジ科 半常緑低木
花期3~5月

本州(紀伊半島)、四国、九州に生え、木の高さは1~2mになるフジツツジ。全体的に花も木も小柄で繊細な印象を受けるため、大きい花を咲かせるオンツツジ(雄躑躅)に対してメンツツジ(雌躑躅)とも呼ばれています。



ヤマブキ(山吹)

バラ科 落葉低木
花期4~5月

北海道南部、本州、四国、九州、中国など、通常は、山地の湿った所に生えています。木の高さは1~2m。古くは山振という字が使われており、しなやかな枝が風に揺れる様子から名付けられたと言われています。



ヤマボウシ(山法師)

ミズキ科 落葉高木
花期5~7月

本州、四国、九州に生え、街路樹などに利用される、高さ5~15mの落葉高木です。老木になると木の皮が不規則にはがれ、まだら模様になることが特徴。果実は甘く、直径1~1.5cmの球形で、9~10月に赤く熟します。



「森の中の作業は楽しい、
 間伐はとても大切だと思うけど、
 それだけでいいのかな？」
 そんな声が聞こえてくるなか、
 湧水がなくなってきた森、水が枯れた山を再生しようと
 大川村の有志たちが村有地にバナヤミズナラ、クヌギなどを
 植えはじめました。
 30年後、100年後を見据えた息の長い活動です。
 大切なのは、明日の森。
 水が枯れた山がよみがえる。
 森が豊かになれば川や海も豊かになる。
 そんな思いを持って活動をはじめた
 人々の活動を追いました。

【特集】 明日の森へ、 いっしょに つくろう。

森を壊すのも、森を再生させるのも人のチカラ、
 私たちには大きな可能性があるという特集です。



『木を植えた男』

ジャン・ジオノ 原作 フレデリック・バック 絵 寺岡襄 訳

あすなろ書房から発行。定価は1,680円

今回おすすめの本を
 ご紹介してくれた人

地紅茶生産者
 片岡桂子さん



高知大学農学部で森林科学を学び、会社員を
 経て、仁淀川町でお茶農家として暮らし始めた
 片岡さん。煎茶の二番茶でつくる「香ル茶」は、
 渋みがでない、いい香りのするストレートティー。
 砂糖やミルクも必要なく、お年寄りや子どもにも
 飲めると好評です。

片岡さんの「香ル茶」茶畑作業日誌
<http://kaoruchadiary.blog89.fc2.com>



ひとりの男性が
 荒れ地に木を植え続けるなかで
 生命の息吹が地中からほとばしりでてきました。

世界中で読まれている
 有名なお話ですが、皆さんは
 実際に読んだことが
 ありますか。著者のジャン・
 ジオノの詩的で美しく
 静かな文章と、このお
 話のアニメーションでア
 カデミー賞を受賞したフ
 レデリック・バックのす
 ばらしい絵で語られる、
 あるひとりの、ひとりで
 荒れ地に木を植え続けた
 男性の物語です。
 ふたつの世界大戦をは
 さみながら、物語は進行
 します。世の中のめまぐ
 るしい移り変わりの中
 で、そんな世の中とはま
 るで関わりがないかのよ
 うに、荒れ果てた大地が
 人知れず淡々と、ほんの
 少しずつ、緑に変わって
 いきます。それにとも
 なって大地は生命力に満
 ちあふれ、活力を取り戻
 していきます。
 森という存在の大きさ
 とともに、このお話が訴
 えかけてくるのは、誰も
 住まなくなった荒れ地で
 たったひとり、木を、ドン
 グリを、植え続けた男性
 のことです。単純で地道
 な、そして気の遠くなる
 ような仕事。でも振り
 返ってみれば大きなこと
 を成し遂げていました。
 地道に、あきらめずに、ひ
 とつのことを積み上げて
 いくことの尊さが光り輝
 くお話です。

大川村の山の谷水は「四国のいのち」早明浦ダムに集まる。
僕たちはもう一度山の子カラを感じ、いっしょに育みたい。

100年先の子孫のために、 30年先の森のために、 今から山にバランス良く 木を植えよう。

山に入る男が、
谷が枯れたことに気付いた。

「私たちが小学生の頃には、山のいろんな場所
で湧水があり、小さな谷があり、フキの葉っ
ぱで水を溜めて飲んで、いた記憶が残っていま
す。もうだいぶ前に、散歩をしている途中「確
か」に水が流れていたな」て気付いていますし
たが、今では谷がほとんど枯れている状況で、
出ないのが圧倒的に多いですね。(山中さん)

森林率も約94%と高く、四国の大河であ
る吉野川の源流域にあたり、四国四県の水源
地として知られる「早明浦ダム」がある大川
村。水に対して不安がないと思われる村でさ
え、「山の水が枯れる」と危機感を持った大川
村の有志たち。その危機感が活動になり、「30
年先の森のため、100年先の子孫のために」
枯れてしまった山から湧水や谷を復活させる」
と、具体的な行動をはじめました。

大川村はこれまでも山を大切にしている活動を
してきました。例えば1972年(昭和47)「白
滝鉱山」が閉山、その後の交渉で村有地になっ

た同場所を「村民の森」にしようと、お年寄り
から子どもまで2、170本の広葉樹の苗木
を植える運動を展開しました。また、森づくり
をさらに広げていくために、「コナラ、アラカシ、
クヌギなど」粒のどんぐりからできることをす
る「どんぐり銀行」をつくり、香川県をはじめ
とする全国の人や団体が大川村に来て、植樹
や下草刈りなどの作業をしてくれます。

このように、山に対して向き合ってきた地域
でさえ危機感を募らせている現状に、どのよう
な活動をしているのか、白滝の里を運営する
「大川村ふるさとむら公社」専務理事の近藤
政徳さん(協同組合「木星会」代表の川村純
史さん、大川村森林組合の山中哲也さん)に話
を伺いました。3人に案内されたのは、白滝の
里から旧鉱山鉄道があった山沿いの道。徒歩
20分程度の場所。とてもきれいに整備されて
いる帯がありました。

「ここは15年ほど継続して、県外の企業さん
から毎年約30名の社員が来てくれ、植樹や間
伐、下草刈りをしています。もちろん私たち
地域の人も参加しますが、ある年の作業中に

ふっと聞かされたのが「山の整備は環境を守り、
自分たちの心も満たされるけど、これって目
に見える効果ってわかるの？」という女性の
声でした。

植樹した、間伐した、言葉では「山にとっ
てこんな効果があります」といっても、それがど
こまで正しいかは言いきれないし、比較もでき
ない。その中で、目に見える効果を考えたこ
き、すぐに、「水が枯れた山に谷を復活させる」
ことを目指すことにしました」と川村さん。

「健全な山」のデータができれば
それを目標に皆が活動できる。

有志の会ではその目的のために、今年から
山のデータを整理、測定をしていきます。企業
が整備している場所は、実施前に山中さんから
大川村森林組合で測量したものがあり、企業
が今までの種類の広葉樹をこの年はどこに
何本植えたか、間伐はどうしたかなど保全活
動の記録が残っています。そうしたデータを整
理、蓄積し、専門家に調査してもらおう計画で

す。この活動に共感してくれた企業側も費用
負担に応じてくれるといえます。

「例えるなら山の整備前のデータ。植樹、そ
して間伐など山の手入れ、これら保全活動を
続けていくことで、山がどう変わっていくか、と
いうことを年々記録して調べていきます。山の
本来の機能である保水力をはじめ、「健全な
山」になるためにはどうなればいいのかという
ことをデータ化できれば、県内に広がる「協働
の森づくり」や「森林保全ボランティア団体」
も、きっと明確な目標ができるのではないかと
思います。特にこの地域は四国の水瓶と言わ
れる場所だけに、大事な取り組みになると思
います。

水が枯れた山に谷が復活する。この取り組
みで結果がでるのは30年あるいは100年先
かもしれません。そのためにも資料をつくって
いく。森林保全活動に参加してくれている人
たちにとっても「次の世代にバトンタッチでき
る」というプレゼントなんです。それって面白い
ことでしょうか。やっぱり感動がないと長続きし
ませんよね。(川村さん)



次世代へバトンタッチできるまで頑張る。



人のチカラによって健全な山になっていく。



山の谷水が枯れた場所を教えてくれる。

バランス良く木を植え、地域が世話をすれば、山は答えをくれた。
湧水が出なくなった森、水が枯れた山に谷が復活した。

山のチカラと 地域の思いが 重なったら、 健全な山へ 姿を変えてくれた。



協同組合「木星会」代表
川村純史さん

水が枯れた山に谷を復活させる、この取り組みの中心人物。森林保全活動にも「感動」が必要だという。



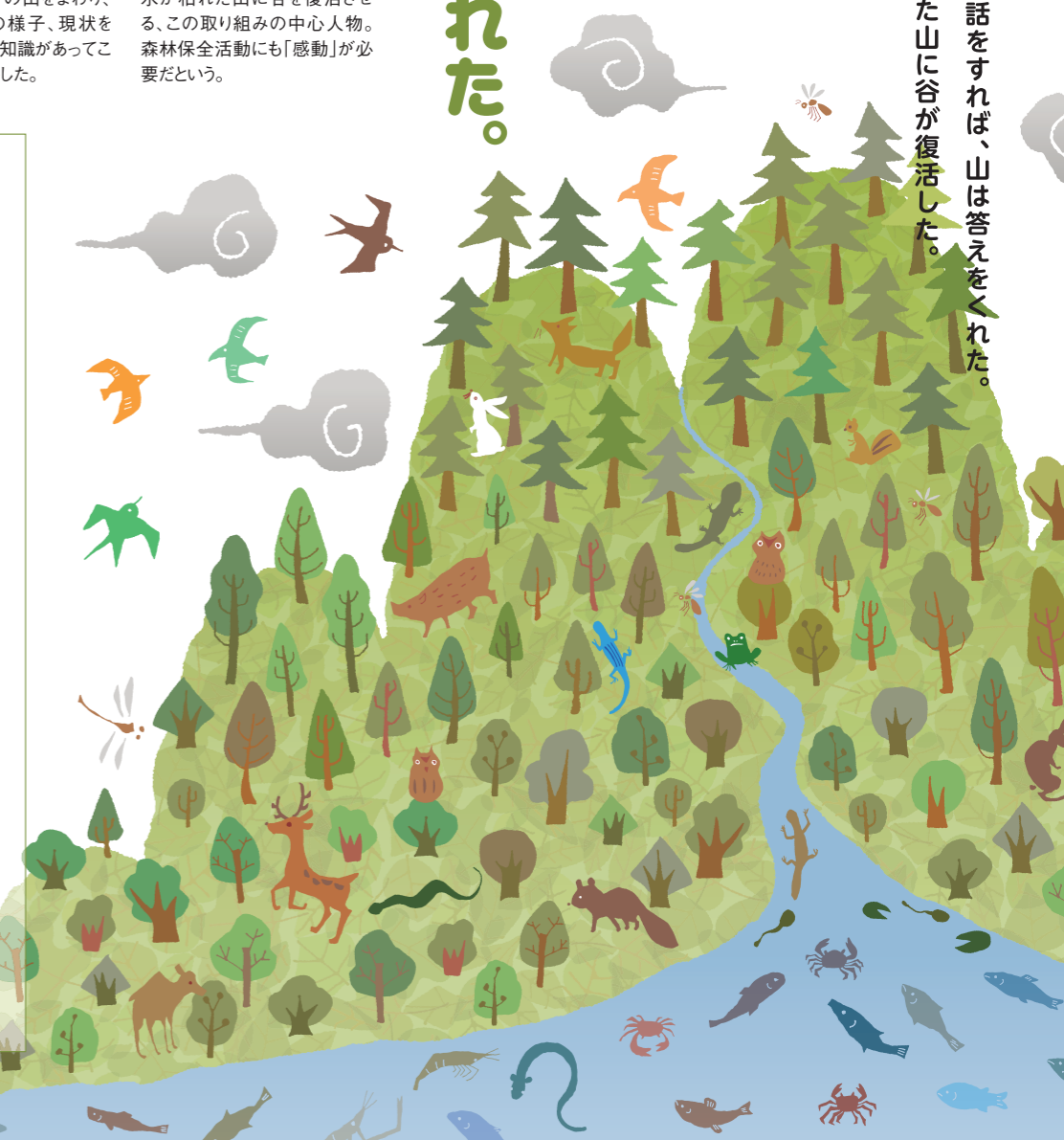
大川村森林組合
山中哲也さん

日頃から大川村の山をまわり、最も身近にその様子、現状を知っている。この知識があってこそ活動がスタートした。



社団法人大川村ふるさとむら公社
専務理事 近藤政徳さん

新しい大川村の観光資源として、大座礼山の池を昔の姿に戻そうと、これから本格的な活動をしていく。



子どもたちに読んでほしい本。

健全な山は、水を保水し、その一部は川をつくり、海に向かいます。これは私たちの暮らしにとっても大事なことです。そのことが分かる本を紹介します。

ボクも、川になって

里見 喜久夫(作) / 牛島 志津子(絵)
ダイヤモンド社 1,470円(定価)



この星のあらゆる生き物に恩恵をもたらす水。山川海を巡る水の循環を、美しい文章と絵で記した絵本。

川は生きている

富山 和子(作) / 大庭 賢哉(絵)
講談社 青い鳥文庫 609円(定価)



水はどこからやってくるのか。川を知ること、森の大切さが見えてくる。産経児童出版文化賞受賞作品。

高知県内では森林保全ボランティア団体による「森づくり」が各地で行われています。

間伐は気持ちいいよ、が朝霧のモットー。

朝霧森林倶楽部

平成16年に結成し、旧窪川町内を主な活動範囲にしている「朝霧森林倶楽部」の事務局長、湯浅文彦さんにお話を伺いました。現在会員は28名で、うち女性が2名です。結成当時からメンバーが多く、60代が中心で、40代もいます。基本は月2回集まり、町有林(主に学校林)の間伐作業や里山・景観保全活動などが中心。地域の小学校へ森林環境教育なども行います。湯浅さんも結成当初に初めて山に入り、間伐した後、山に陽ざしが入ってきた瞬間「気持ちいいなあ」と印象深かったようです。「一定年後の健康維持が活動理由だね」と笑顔で話す湯浅さん。「間伐をして木が大きくなっていく姿が嬉しいし、先代達が植えたスギやヒノキを、継続して誰かが管理することの責任感。これはメンバー皆の意見です」と話します。今後も地域活性化の貢献、NPO法人化など積極的な展開を目指しています。



こうち森林救援隊 人が山村に入ることで森も地域も元気に。

「こうち森林救援隊は、高知市民の水瓶である鏡川の源流域を守るために立ち上げられた団体です。毎月、鏡地区の梅ノ木公民館を拠点とした宿泊型のボランティア活動として、間伐などの森林整備や間伐材を使った木工品づくりなどを行っており、秋にはボランティア祭り(今年は11月3日)も開催しています。このイベントは協働の森づくりで応援していただいている企業や行政、そして地域や隊員の家族など多くの皆さんの支えによって、すっかり地域にも定着し、中山間地域の活性化にも繋がってきています。」

そう語るのは、事務局長の中川睦雄さん。

こうち森林救援隊は平成17年に結成。登録メンバーは300名を越えています。現在活動に参加されている方は90名位。中川さんは、森林保全

のボランティアが森を守る担い手として山に入った。一般の方がグリーンツーリズムで山村との交流を深めていくことで森や地域が元気になっていくとの熱い想いを持っています。現在は、防災対策上からも見直されてきている里山の整備にも力を入れており、源流域と里山の双方で幅広い活動を行っています。

問合せ / こうち森林救援隊 中川
TEL / 088-843-7440



森林保全ボランティア活動推進事業

森林環境税を活用して、森林整備を実践する森林保全ボランティア団体の設立や間伐などの活動を支援しています。例えば間伐等に必要となる作業安全研修の実施、機械器具の支給などです。

問合せ / 県林業環境政策課
TEL / 088-821-4586

こうち山の日推進事業

高知県森と緑の会を通じて、県民一人ひとりが山を守る活動の大切さに気づき、森や山への理解と関心を深めていただくために、「こうち山の日(11月11日)」を中心とする県民が主体となって行う活動を支援しています。

問合せ / 公益社団法人 高知県森と緑の会事務局
TEL / 088-855-3905

経済林と雑木林の組み合わせが次世代へのプレゼントになる。
大川村の有志たちがすすめる「森のすがた」を聞きました。それは「できるだけ多くの山に広葉樹の森を広げていきたい。ただ現実として、経済林としてのスギやヒノキがあるので、それを活かすつ、例えば河川の上流50メートル位までの人工林を雑木林に戻したい」といいます。
「スギやヒノキは間伐や枝打ちを行い、太陽の光を地面まで入れることで下草や低層木が生え、雨に強い土壌になり、生物の多様性も向上します。さらに、広葉樹を中心とした雑木林も根は地中深く入るために土砂をおさえ、葉が落ちるとそれらを栄養として虫などが繁殖し、下草やコケなども多く生えます。これらはスポンジの様な役目を果たすので、大雨の時でも土砂などを極力流さないでしょう。こうして、経済林と雑木林をうまく組み合わせることが大切です」と川村さん。
今回取材している場所と並行して、登山客が多くフナ原生林で有名な「大座礼山」の頂上近くにある2つの池を復活させようとしている。これもスタートしたばかりで、まだその場所へ行くまでの整備もままならないが、「本当の山つくりの見本になる」と近藤さんを中心にメンバーが張り切っている。
「大座礼山の頂上近くに上池、下池という池があつて、それは昔、水がたぐりあつたんですよ。その池をまた、昔に帰そうと。すごく時間がかかるとは思いますが、大座礼山というフナの原生林が有名な場所です、それプラス美しい池があれば、大川村の観光地としての魅力になっていくと思います」と近藤さん。
大川村がこれまで進めてきた「村民の森」全国に広がる「どんぐり銀行」今回取材している「枯れた山から谷を復活させる」場所、そしてこれから新たにスタートする「大座礼山」。山のチカラを信じている地域の人たちが、それを信じて活動していく姿に、たくましさを感じました。

